



# 自分を肯定する魔法にかがる

## ～Villa CAMPOのこと～

船戸 博子

Villa CAMPOでお馴染み、4バットイ伝統医学の専門家である中野真澄さんの紹介で、スタッフとして働くことになった篠田栞(しおり)ちゃん。彼女に会った時、「いろんな場所をウロウロしながら生きていく方が、自分らしくいられる子」だとすぐ分かりました。

2ヶ月半限定で現在食堂で働く彼女に、Villa CAMPOのことを書いてもらいました。



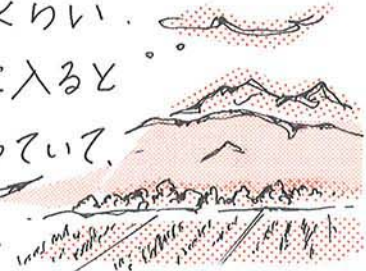
### はじめのVilla CAMPO

私がはじめてVilla CAMPO(以下、ヴィラカンポ)を訪ねたのは7月のことだった。

ハルノの旅で薬草に興味を持った私は、帰国後すぐに、4バット医学の専門家の中野真澄先生にご相談した。

すぐにお返事をいただいて、「岐阜の養老にそれはもうとっておきの場所」があるからと、こちらへ連れてきていただいたのであった。

朝早くに真澄先生と京都で待ち合わせ、車で岐阜へと向かった。雨上がりだった気がする。伊吹山は黒にも近いくらい、深い青緑の山肌には半透明の雲がかり、養老に入ると左右に見える田んぼからは水蒸気が立ち上がっていて、なんというか、力強い、守られた土地だなという感じがした。



到着後すぐに、真澄先生に施設内を案内していただいた。漢方外来を含む外来診療をされている船戸クリニック、統合医療センター、リハビリセンターや訪問看護ステーションのあるエリア、もりもりあらゆる薬草や植物の生い茂るガーデンやダマヌールサーキット、宿泊施設のあるヴィラカンポ。セラピー、治療として、癌等の治療を目的とするものから美容まで、古今東西の技術を専門とする様々な治療家やセラピストの施術を受けることができる。



真澄先生の案内を受けながら「小さい頃に童話で読んだ魔法使いの村が本当に岐阜にあったのか」と思った。

自分に、少々夢想的なところがあるのは自覚しているのだが、私のイメージする魔法使いや魔女は、あらゆる自然からの知恵を扱い、人を助ける技術を持った人のことである。苦しみや病を広い視点から捉え、手を救い、自立した生を生きるための手助けをしてくれるような存在。それはとても統合的な技術を持った存在なのだと思う。



## 人の幸せを祈る多角的なケアのかたち

さて、「フナクリ食堂でランチをしてみよう」というのが目的で養老に連れてきていただいたのだが、この1日は、予想していたよりもはるかに濃厚だった。

真澄先生とランチまでの時間、せっせと内職作業をしていた時のこと。大きな楽器を持った霧田氏のある方がお部屋にいらしゃった。そのかたは、オーストラリアの民族楽器ディジュリドゥを演奏される小坂先生で、これからここで、お稽古会がはじまるとのこと。

「治療に使うんですね。」

とおっしゃって、ディジュリドゥを私の身体に向かって鳴らしてくださった。ポオーツという長い音の響きに身体を包み込まれ、内臓を揺らされる。

お寺のお堂の中にいて空間全体が揺れているような、内臓がバ地よい振動で揺さぶられて、涙が振り落とされていくような感じがした。

呼吸、音、全てが身体を調律してくれる。音の波が薬が浸透するかのよう、体に染み渡る。確かにこれは治療なのだと感じた。



楽しみにしていたランチの時間には、フナクリ食堂の定番メニュー「おくすりなランチ」を注文した。

自由にいただける薬草茶が身体に染み込む。プレートに色鮮やかに盛り付けられた一品一品は、「一ローロごとに、野菜の力をもらっている」という実感の湧いてくるような味だった。そういう実感のことを美味しいと呼ぶのだろうかと思った。

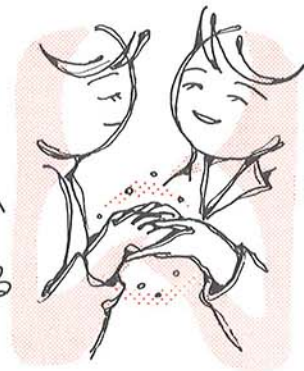


私は20代の頃に、いわゆる拒食症になっていて、自分の外見へのコンプレックスをコントロールできずに、食というものを内心では、ほとんど放棄していたような時期があった。フナクリ食堂でランチをしながら「食べることを肯定できる」ってありがたい感覚だな、などと考えていた。

ランチの時、たまたま一緒した溝口真以先生は、船戸クリニックで勤務されている産婦人科医の先生。同い年ということもあって竟気投合した。船戸クリニックやヴィラカンポのことを教えてくださり、産婦人科医として、船戸クリニックに来るまでの経馬も色々とお話ししてくださった。

「人はどうしたら幸せになるのかなって考えるんです」

と真以先生は言った。「医者が全てを治せるわけでない。自分を信じて、自分の力で治していかなければいけない部分がある。だから、患者さんが自分を信じられるようにお手伝いするんです」



真以先生はこちらでカルサイネイザンというチベット医学にベースのある女性限定の膣のマッサージも担当されている。

自分の生殖器とどのように付き合っていくべきか、ということを考えるイベントを企画したりしながら、産婦人科医の視点で、生命に向き合うためにさまざまな取り組みをされている。

お人柄もチャーミングな方で、面白い産婦人科の先生がいらしゃるのだなと親しみを感じた。(真以先生とは、その時からのご縁で、今ではよきお茶&焼肉仲間。)

濃厚な初回訪問の日の夕方。

船戸博子先生と最初にお話ししたのは、ほんの少しの時間だった。博子先生の強くて深い目の光に圧倒されたのを覚えている。

## 自分を肯定する魔法にかかると

そして、はじめて船戸クリニックを訪れた数週間後のこと。ご縁をいただいて、博子先生とチベット医学の専門家中野真澄先生が企画されている「女神リトリート」に写真記録係として入らせていただくことになった。この時、私は、2泊3日のリトリートを通じて、参加者の皆さんがみるみる変わっていかれる様子を目の当たりにしたのである。



その場にカメラマンとして同席しているだけで、不思議と自分自身も整っていった。

「人というものは、誰しも可愛く、誰しも美しい。」そんなことを心から実感し、恥づかしげもなく言葉にしたくなってしまふ自分に、驚いた。

「医療としてのケアだけではなくて、ケア（精神、心、魂まで含めた）までやりたい。」「舟戸クリニックという、ガン、漢方外来の専門医療地域に根ざした医療（ケア）を根拠として、すべての人が自分らしさを取り戻すことをサポートするケアの場をつくりたいの」という博子先生の大きな優しさは、この場所をふんわりと包み込んでいる。

現代を生きている私たちは、私含め、毎日やっている呼吸ですら、上手にできていないんじゃないか？と思うことがある。「自分らしさ」と言われたって、食べることも、寝ることも、心身を健やかに保つということも、結構、難しいと思う。

この場所は、そういう「私たち、すべて」に対して開かれている。



舟戸クリニックで働きはじめて、もうすぐ2ヶ月。この場所で働く間に、ここを訪れたお客さんが、子どものように、笑って、泣いている姿をみた。あの時垣間見た、あの光景こそが、きっと、ヴィラカンポの魔法なのだ。



藤田梨